

所長あいさつ

長崎県教育センター所長 長谷川 哲朗

授業の力

授業について考え、論じるとき、決まって思い起こす文章がある。

授業というものには、子どもの中に、その深いところにしまい込まれているものを掘り当ててそれを引き出すという機能がある。それが授業である。それが教育である。授業にはそれほどの力があるのだ。

林竹二先生の言である。授業力などという輪郭のはっきりしないイメージだけで語られるものと比べると、これほど授業の本質を衝くものはない。「授業の力」とは、授業という営みが本源的に宿している力のことだ。

授業という場には、子どもがいて子どもたちがいる。

教師がいる、教材がある。子どもと教師との問答、子ども同士の対話や交流、教材との向き合いが、深いところにその子の学びを生み出し、それが授業という営みの中で掘り起こされていく。

授業とは、この授業のもつ力を発現させ、機能させることだ。授業の力が満ち満ちた教室は、子どもを新しい学び手へとつくりかえていく。

だから教師には、授業の力を巧みに生かして、子どもの中に学びを生み出し、それを引き出していく力量が求められる。そして、生み出され、引き出されたものを、その子の言葉や表情、所作から感知し、その内側を推し量って、そこから教室全体の学びを紡ぎ出していく、そんな力量を備えたい。

このような授業の本質を抜きにして、指導過程や指導方法など、どう教えるか、という地平だけで授業づくりを論じても、その授業は子どもを置き去りにした底の浅いものになるのではないか。

思うに、今次の課題である主体的な学びの姿勢も、多様な対話的な手法も、そして目指すところの学びの深さも、この授業の力を抜きにしてはありえない。アクティブ・ラーニングの視点とは、本源的な授業の力を呼び起こすもの、そうとらえている。

